

THE NATURAL ELEMENTS OF KII-OHSHIMA ISLAND

First edition

Dr. S. Umemoto and the associates

CONTENTS

Introduction

Chapter 1 : The natural elements of the Island

Geology

Plants and Vegetation history

Mosses and Fungi

Insects and Birds

Chapter 2 : Conservation topics in the Island

History and roles of 'fish-gathering forest'

Introduction of *Viburnum japonicum*

Colonization of *Lilium formosanum*

Variation in wild radish

Chapter 3 : Ethnological collections

Climate

Terrestrial plants

Fish and Sea life

Reference

2003 Universe Printing

THE NATURAL ELEMENTS OF KII-OHSHIMA ISLAND



紀伊大島 フィールド・ガイド －自然編－

2003年版

紀伊大島 フィールド ガイド

自然編

2003年版

はじめに

紀伊大島は、本州最南端にある潮岬の東方海上に位置する謎とロマンに満ちた島です。面積 9.92km²、周囲 28.0km、最高標高 171m といった寸法の島ですが、ここに悠久の歴史と自然と文化が詰まっています。

紀伊大島はほぼ台地状で、西から東へ大島地区、須江地区それに檜野地区が並び、お互いに鬱蒼とした照葉樹林で隔てられています。沖合には豊かな恵みをもたらす暖流、黒潮がときに亜熱帯的事象をも運んでくれます。

1999 年 9 月 9 日、紀伊大島島民の長年の夢であった本州との架橋が実現し、縄文時代以来、久々に紀伊半島と地続きとなりました。そうした中で、新しいタイプの観光客、つまり、ある地域の自然や歴史、文化を勉強したいという「学術」観光客や地域の生業や暮らしを体で知りたいという「体験」型観光客が増加する一方、地元でも紀伊大島自体のことをあまり知らない世代が増加してきました。

この「紀伊大島フィールド・ガイドー自然編ー」は、こうした背景のもと、まずは地元のことを詳しく知り、島民と訪問客が一緒になって認識を新たにしようじゃないかという気持ちで作成されました。当初は、文化についても詳しく盛り込む予定でしたが、諸事情で次回ということにしました。

中国の古典「易経」は、観光を“国や地域の光を見ること”と表現しています。この「紀伊大島フィールド・ガイドー自然編ー」が、紀伊大島の人々と紀伊大島への訪問客のための“光”となれば幸いです。

なお、この「紀伊大島フィールド・ガイドー自然編ー」の出版は、「平成 14 年度ならびに平成 15 年度串本町地場産業育成及び観光事業等推進資金助成事業」助成金によるところが大です。私や黒潮文化研究会の考え方にご理解を戴いた田嶋勝正町長および串本町役場経済観光課の皆様、紀伊大島島民各位に深謝する次第です。

2003 年 7 月 5 日

黒潮文化研究会
代表 梅本信也

目 次

「紀伊大島フィールド・ガイドー自然編ー」は、紀伊大島の自然や環境に関する事柄を、島内探索や自然観察を行う際に参考になるように、地形、土壌、植生、動物、いくつかのトピック、民俗分類（方言）に分けて、それぞれの概略を紹介しています。もっと勉強したい地元や学術観光の方々、学生さんのために、参考となる書籍や文献も紹介してあります。

記述内容に間違いがないように努めました。問題点がいまだ多く潜んでいると思います。説明はできるだけ平易に、と意識しましたが、難しい表現が多発してしまいました。皆さんからの意見を踏まえて、さらに欠点の少ないものにして行きたいと考えています。

はじめに

第1章 自然誌	01
紀伊大島の地質	02
紀伊大島の植生と植物	04
紀伊大島の蘚苔類	11
紀伊大島のキノコ	12
紀伊大島の昆虫	19
大森山の鳥類	21
第2章 トピック	25
樗野魚付林の歴史と保全	26
ハクサンボクの教訓	30
タカサゴユリの秘密	33
ハマダイコンの謎	35
第3章 方言集	39
紀伊大島の民俗気象	40
紀伊大島の魚類方言	43
紀伊大島の海産生物方言	48
紀伊大島の植物方言	50
文 献	52



Chapter 1

自然誌

The natural elements of the Island

紀伊大島の地質

紀伊半島の地質

紀伊半島の大半を占める和歌山県は、おおむね北から南へ向かって地質年代が新しくなるパターンです。紀ノ川北側にある和泉層群は領家変性帯に属し、今から約7000万年前の中生代白亜紀後期起源ですが、南接する三波川帯は中生代ジュラ紀、有田川の南にある秩父帯は白亜紀、四万十累帯は白亜紀から新生代となっています。四万十累帯の南半分は牟婁帯と細分され、新生代第3紀に関係しています。第3紀の前半には熊野海盆内の海底に大量の堆積があり、隆起して牟婁層群となったようです。

過去の火山活動

その後、この地方では活発な火山活動が連続し、熊野酸性岩が形成されました。この間に潮岬火成複合岩体といわれるものが生じたそうです。何と潮岬から紀伊



紀伊大島西部 水谷地区

大島に至る地域は、今から約1500万年前に大規模に起こった海底火山活動とそれに先行する海成堆積層のコラボレーションによって形作られたのです。このころ、プレートの配置が現在と異なり、古紀伊半島直下のアジアプレートに向かって海嶺が南東から沈み込み、活発な火山活動を励起していたようです。同じ頃には古那智火山が富士山級の高さとなり、その後に陥没して大カルデラを形成していたと考えられます。

紀伊大島地域の地質については、三宅康幸(1981)の詳細な研究があります。それによると、紀伊大島の岩石は海成堆積岩と火山性の貫入岩とで出来ています。詳しく見ていきましょう。

紀伊大島の地質

紀伊大島は、下位より泥岩層と流紋岩質火砕岩層が分布します。泥岩層はおもに紀伊大島西部に、流紋岩質火砕岩層は東部にあって、一部は指交しています。紀伊大島北西部にある泥岩層は厚さが300m以上もあって、大島港南部の水谷から海産生物化石が報告されています。流紋岩質火砕岩層は、厚さが200m以上あり、須江の須江崎で露頭を見せています。須江崎の断崖では淘汰不良の凝灰角

礫岩と成層した結晶凝灰岩からなる流紋岩質火砕岩層を観察できます。

檜野崎の流紋岩質火砕岩は、須江崎と異なり、凝灰角礫岩が泥質です。島の中央部の標高171mの大森山西麓では、流紋岩質火砕岩は泥岩と指交します。須江西方では流紋岩質火砕岩に厚さ20mのレンズ状泥岩が狭在します。

これらの堆積岩類にシソ輝石流紋岩が貫入しています。これは紀伊大島東部と西部に分かれて2ヶ所あります。東部では流紋岩質火砕岩に貫入し、檜野崎灯台付近では境界は垂直です。西部ではシソ輝石流紋岩が、泥岩層と流紋岩質火砕岩層を見かけ上被覆しています。

泥岩層と流紋岩質火砕岩層の走向はENE－WSW、傾斜は須江北方で75度、その他では10～50度で北または南に傾斜します。ENE－WSWの軸を持つ波曲構造をなしています。



紀伊大島東部 ウズ島

紀伊大島上部が台地状なのは、過去の波食とその後の海面変動または隆起と関係しています。その隆起には、フィリピン海プレートがアジアプレートへ沈み込むために、100－200年周期でこの地域を襲う大地震が関係しているようです。

このように、紀伊大島は様々な種類の様々な起源の岩石からなり、長い歴史の中で様々な作用を受けながら形成され、今なお変化しているのです。紀伊大島の形や位置は将来はどう変化していくのでしょうか。

(梅本信也)

メモ

江戸時代から紀伊大島の水はうまくて腐りにくいといわれてきました。紀伊大島の生活水の源は、天水、雨水、川の水、湧き水です。そうした水の源はもとを正せば、雨水です。しかし、一部はもっと深いところ、たとえばプレート境界から来ているかも知れません。それが腐りにくい原因かも知れないのです。さらなる検証が必要です。

(梅本信也)

紀伊大島の植生と植物

起源

紀伊大島が誕生して以来、飛行性の動物、海流や沿岸流による漂着、風、人間など様々な原因によって多種多様な植物がもたらされ、定着しては絶滅してきました。江戸時代からの紀伊大島は、丁寧に開墾されこまめに維持管理されてきた里域区画と神聖な領域として別格扱いされてきた区画からなり、それぞれを合わせると約1000種類にもおよぶ様々な自生高等植物が生育してきたのです。持続的管理がなされていた時代には、植生や植物の移入移出の平衡が保たれて、植物の高度利用が進んだと考えられます。

紀伊大島は面積的には約10km²と小型の島ですが、半乾燥地から谷間の湿潤な場所、農耕地から魚付林や社寺林など生育地の多様性は大変に高いといわざるを得ません。



ハマユウ

植物移入の歴史

江戸時代以前のことは今後の検討課題ですが、現在の紀伊大島の植物と植生と直接関係しそうな歴史的植物要素を区別しますと、

1) 在来植物群

2) 熊野水軍など江戸時代以前の海上交通による移入植物群

東海、関東地方や瀬戸内海の植物が来たと考えられます。

3) 江戸期の回船交通による移入植物群

他地方からの移入がさらにすすんだと思われます。

4) 近代における南方植物群の移入

旧日本の大陸進出、南方へので稼ぎによって数多くの珍奇植物がもたらされたと思われます。

5) 帰化植物群

特に第二次世界大戦後の高度経済成長によって多種多様な雑草が島にもたらさ



路肩の雑草 セイタカアワダチソウ（左）と
シナダレスズメガヤ（右）

れたと思われます。また、道路工事の法面緑化からの逸出も無視できません。

6) 園芸植物群

江戸期から、里庭 *satonwa* で古典的な園芸植物が観賞用や薬用のために栽培されてきましたが、最近では驚くほど多種多様な外来の園芸植物が本土の園芸店やリビングセンターで簡単かつ安価に購入できるようになりました。

7) 串本大橋架橋後の移入群

巡航船・フェリー時代に比べると、島外からの移入速度が格段に高くなりました。

以上のような7つのグループに区別して考えると植生の成り立ちを理解しやすいでしょう。

このように、様々な時代に様々な事由によってやってきた植物が重層構造を作りながら、紀伊大島の環境に適応し、現在の植物社会を作ってきたと考えられます。利用性の程度や害悪の程度は様々ですが、全てが財産と見なせます。そしてこれらを積極的に支援してきたのは、沖合を流れる暖流黒潮であり、島の住民です。

現在の植物多様性

岡山大学の榎本敬博士と倉敷市立自然史博物館の狩山俊悟博士による串本大橋架橋前の植物相調査が行われ、京都大学大学院農学研究科附属亜熱帯植物実験所編「紀伊大島植物目録：高等植物」としてまとめられました。それによると、紀伊大島には1999年現在で134科749種



アジサイ



サンゴシトウ（デイゴとアメリカデイゴの雑種）



アガパンサス



リュウビンタイ

にもおよぶ顕花植物とシダ植物が確認されました。絶滅が危惧される植物も自生が確認されました。帰化植物は29科88種が採集され、全植物種に対する帰化率は約12%であったといいます。

植生の解説

紀伊大島は、年平均気温が大体16℃前後で、降霜や降雪がまれで大変温暖です。年平均降水量も3000mm内外となり、多雨です。森林の開発と利用も進んだはいえ、基本的には暖温帯常緑広葉樹林あるいは照葉樹林に被われています。谷間には小川または水田が数珠状に展開し湿生植物の生育地となっていました。時折、海からの海煙粒子（塩分）がもたらされ、海浜性の植物が内陸に見られたりします。海岸部には独特の樹形を示す風衝林があります。島はテーブル状で周囲は断崖絶壁であるため砂浜は少ないのですが、開発が進んでいない場所には良好な砂浜植物群落があります。その一方で、大森山周辺ではまるで紀伊半島の山奥に



谷間の水田



マメヅタ

いるような錯覚を受けます。

上記の植物相調査報告に準拠して、島の内の各植生の特徴をスケッチしていきましょう。フィールド・ウォッチングの参考としてください。



風衝林



ホシクサ
(写真：道下雄大)

1) 大島地区日和山から水谷

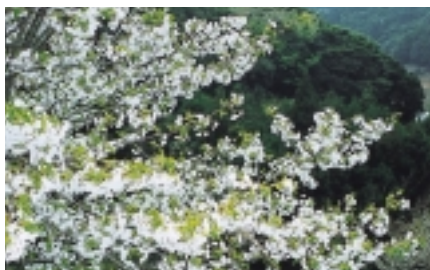
北西斜面地形で湿潤です。タブノキが優先しますが、スダジイ、タイミンタチバナ、ヤブニツケイ、ツバキ、ハドノキが混生することが多く、林床は暗いです。ハドノキはこの一帯に普通ですが、亜熱帯性植物であり紀伊半島では紀伊大島のみに分布します。林床には、アマクサシダ、ヤワラハチジョウシダ、ナチシダなど18科50種以上のシダ植物、さらにニノシランが分布します。放置されたモウソウチクが暴れているのも見られます。



ハドノキ

2) 須江地区ナギの谷

小規模な水田と休耕田があり、ヤナギタデ、ハンゲショウ、コケオトギリ、ミズオオバコ、イボクサ、クログワイなどが分布します。



オオシマザクラ 葉は桜餅に使用

3) 須江峰地南方の浜

レキ性海岸に、イワタイゲキ、アシタバ、ハマアザミ、ハマボッス、キノクニシオギクが分布します。



アシタバ

4) 須江白野の浜

島では数少ない砂浜海岸があり、ハマツメクサ、ハマダイコン、ハマゼリ、グンバイヒルガオ、イワダレソウ、コウボウムギ、コウボウシバ、ダンチクが生育します。



ハマナデシコ

5) 須江漁港

山の斜面にはタイキンギク、ルリハコベの他、サボテンなどの移入植物も分布します。

6) 須江から須江峰地の畑

野菜畑やキンカン園には色々な雑草が見られる他、周囲の旧畑地にはチガヤ、

ススキの半栽培畑もあります。また、戦前から戦後の一時期に利用されたニュージーランド原産のマオラン科マオランも分布します。



トウカイタンポポ



ナンバンギセル (写真：道下雄大)



マオラン

7) 大森山周辺

京大植物園は戦前薪炭利用がなされる二次林でしたが、今は良好な照葉樹林に

変貌しています。スダジイ、ヤマモモなど種数も多く分布します。林床にはアオノクマタケランが群生しています。ここだけで68科138種が記録されています。



アオノクマタケラン

8) 樫野黒鼻魚付林

島北部の急崖付近はスダジイの大木が分布する良好な林で、将来も保護すべきです。その他、タイミンタチバナ、ヤブニッケイ、カクレミノ、ツバキが混生します。谷筋にはカツモウイノデがあり、ホウロクイチゴとオオフユイチゴの混生が見られます。オオフユイチゴはホウロクイチゴとフユイチゴの雑種ですが、紀伊大島にはフユイチゴはありません。これはある種の謎です。



キブシ

9) 樫野前の浜

雷公神社の浜は大型の転石からなり、

良好な海岸風景を示します。ハマゴウ、テリハノイバラ、ハマダイコン、ハマエンドウ、ハマアザミ、ハマナタマメが分布します。斜面にはナワシロイチゴ、崖にはウバメガシ、ハマヒサカキ、クロマツ、タブノキ、林床にはオニヤブソテツ、ホソバカナワラビがあります。



ハマゴウ (写真：道下雄大)

10) 榎野ジゲ田

1990年代初頭までは水田地帯でしたが今は休耕田となっています。中央に水量の多い小川が流れています。古くは集落があったようです。コモチシダ、キキョウ、シンジュガヤが分布します。



ダンチク

11) 榎野漁港

埋め立て地の山側にはハマナタマメ、ツルナ、キケマン、クサスギカズラ、ハマエノコロが生育しています。西の山の

崖にはラセイタソウ、ハマナデシコ、ハマボUSSが分布します。



ラセイタソウ

12) 榎野埼草地

灯台前の草地にはチガヤ、ケブカツルカノコソウ、ヒナギキョウ、ツリガネニンジン、カナビキソウ、ツリガネニンジンが生えています。保護に値する群落です。



コバノタツナミソウ (写真：道下雄大)

13) 榎野埼風衝林

海金剛に至る道で観察しやすい林で



トベラ 種子は粘つく

す。常襲する風のために樹幹が特異な形となっています。モチノキ、ツバキ、ヒメユズリハ、トベラ、ウバメガシ、ハマヒサカキが分布します。林を分断せず、できるだけ保護するべきです。

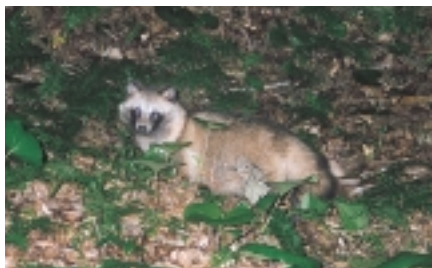
14) 檜野地区の崖

キノクニシオギク、アゼトウナ、タイトゴメ、ツワブキが生育しています。

(梅本信也)



ツワブキ



タヌキ 昼夜とも活動する

メモ

紀伊大島では、ニホンザル、イノシシ、イタチ、ネズミ類、タヌキなどのほ乳類が目撃されます。ただし、ニホンザルは愛好家が捨てていったもので、今はいません。イノシシも架橋後に一時的に侵入したものと思われますが未確認です。タヌキは、糞塚を作るので困り者ですが、紀伊大島のタヌキは昼でも夜でも堂々と行動します。

(梅本信也)

紀伊大島の蘚苔類

種多様性

蘚苔類とはコケのことです。紀伊大島は那智山などの蘚苔類種多様性が高い地域と異なって乾燥気味であり、これまで研究の対象にされたことが多くないので、蘚苔類の標本は少ない方です。兵庫県立人と自然博物館の秋山弘之博士は、串本大橋架橋前の蘚苔類相を精力的に調査しました。その結果、総計45科82属139種の蘚苔類を確認しました。その内訳は、蘚類28科57属91種、苔類16科24属47種、ツノゴケ類1科1属1種でした。これらの詳しい内容は、1999年刊行の京都大学亜熱帯植物実験所編・紀伊大島植物目録に報告されています。

それによると、紀伊大島蘚苔類相の特徴としては、普通種が欠けている点あげられます。その理由は、紀伊大島という狭い立地が、普通種の分散を妨げたからだと考えられています。秋山博士によると、ホウオウゴケ、ススキゴケ、ユミダイゴケ、カラフトキンモウゴケ、コダマゴケ、タマゴケ、オオミズホケ、ハタケゴケ、ギボウシゴケ、ミズギボウシゴケ、ネジレゴケ、ホソバミズゼニゴケがその例だといいます。串本大橋完成前の本土との地理的隔離も一要因かもしれません。架橋後の自然および社会環境の変

容が今後普通種の種数の増加につながるかも知れません。

分布特性

コケのグループ別に特徴をあげれば、スギゴケ科の種数やその生育範囲が目立って少ないようです。しかし、シノブゴケ科の中で乾燥した生育地を好む種や開けた土の上に生育するツリガネゴケでは、逆に種数が多いことはたいへん興味深いと思われます。海岸沿いの暖崖風衝林の常緑樹の幹に、樹幹着生クサリゴケ科の種多様性が高いのも特徴です。一方、湿った生育環境を好むとされるゼニゴケ目やフタマタゴケ目に属する苔類が少ないのです。

こうしてみると、紀伊大島の蘚苔類は、本州の種組成と異なる社会を作ってきたと思われます。その原因は特定できていません。（梅本信也）



痲状地衣（左）とイトゴケ類（右）

紀伊大島のキノコ

紀伊大島には、ウバメガシやスダジイ、イヌビワ、ヒサカキ、ヤブツバキ、モツコク、タイミンタチバナ、ヤマモモ、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カラスザンショウ、アカメガシワ、ヒメユズリハ、カクレミノ、モチノキなどの広葉樹に加えて、スギ、ヒノキおよびマツ類などの針葉樹が分布します。紀伊大島各地区の魚付林にみられるスダジイ類は特筆に値する巨木です。

このような紀伊大島の森林やそれを取りまく生態系は、沿海も含めて、紀伊大島とその周辺住民によって営々と20世紀末まで守護されてきたものです（魚付林の項、参照）。それらは、金銭的、経済的に価値に代え難い貴重な環境・生物資源であり、一つの文化財です。有用・有毒・有用性未詳に関わりなくキノコ類もその一部です。そして、串本大橋開通後も絶やすことなく、キノコ類を含む貴重な生態系を21世紀の子孫達にも伝承していく義務が私達にあります。

種多様性

紀伊大島では、担子菌亜門の29科111種、子囊菌亜門の3科3種が20世紀末に確認されました（リスト参照）。そのなかでテングタケ科、イグチ科、フウセンタ

ケ科、ベニタケ科、オニイグチ科、アンズタケ科に属するほとんどの種は外生菌根菌であり、確認種全体の約35%でした。これらの種は樹木の根との共生体（菌根）を介した養分のやり取りによって、特定のあるいは複数の樹木種と相利共生の関係をもつものです。こうしたさまざまな菌根菌は紀伊大島にある植物の種多様性や植物の健全な生育と有機物生産量の維持に貢献しています。

一方、菌根菌を除く約65%の種は立枯木、倒木、枯枝、落葉などを腐朽する腐生菌であり、有機物分解を担います。こうした種は広葉樹枯木を基質とする白色腐朽菌ですが、特にカワラタケ、ウチワタケ、ネンドタケ、アラゲキクラゲおよび樹皮に白いペンキを懸けたように見えるコウヤクタケ科（Corticaceae）の1種（未同定）は紀伊大島全域に大量に分布しています。

針葉樹枯木を基質とする褐色腐朽菌としてヒロハノキカイガラタケとアオゾメタケがスギ丸太上に、ブドウタケがヒメキシメジ（腐朽型は不明）とともにクロマツの枯株に発生していました。これらは腐生菌全体の約4%、ヒダナシタケ目全体の約10%にあたります。この値は日本に分布するヒダナシタケ目全体に占め

る褐色腐朽菌の割合（約13%），あるいは北米大陸に分布するそれ（約10%）と比較すると，それぞれ同程度です。

マツ林のキノコ

紀伊大島では，昔アカマツやクロマツの林が海岸域に広く分布しており，これらは魚付林の樹種として持続的な沿岸漁業の確保に有効でした。しかし，昭和30年代の松枯れ病によってそのほとんどが失われました。ブドウタケを採取した大森山のクロマツ枯株は腐朽が激しく，かろうじて樹皮が株の形を保っていたものの，蹴飛ばすと完全に崩れました。この株は枯死後10年以上は経過していると思われました。現在は，クロマツ若齢林が海岸部に散在しますが，その他の針葉樹としてはスギやヒノキの小規模な植栽林が点在する程度です。このような林で，上記の褐色腐朽菌は今や細々と生き延びています。

落葉分解性のキノコ

倒木のような大型リターにはタコウキン科のカワラタケ，フルイタケ，ウチワタケ，ヒイロタケ，シロカイメンタケおよびタバコウロコタケ科のオオタバコウロコタケの発生が多く分布しました。枯れ枝などの中型リターには，カワラタケやウチワタケの他にタバコウロコタケ科のネンドタケやコウヤクタケ科の1種の発生が多くみられました。落葉のような小型リターには，いずれもキシメジ科に



シイサルノ
コシカケ

最大の個体は
直径160cm

属する数種のモリノカレバタケ属菌 (*Collybia* spp.)，クヌギタケ属菌 (*Mycena* spp.)，ホウライタケ属菌 (*Marasmius* spp.) などが見られましたが，キノコ発生量は多くなかったのです。これら落葉分解菌の多くは前述の大中型リターの分解菌と同様に白色腐朽型の腐朽型を示し，厚さ1cm程の粗腐植層中の落葉は黄白色に漂白されていました。

一般に，キノコ類は基質に広がる栄養菌糸体による栄養繁殖と子実体で形成される胞子による有性繁殖を行います。この2つの繁殖様式は生息基質や分布域の違いに応じて，遺伝子型についての保守性と流動性のバランスを保つと考えられています。

一方，落葉上に発生したホウライタケ属菌では，古い子実体の茎の基部および倒れた茎の周囲に菌叢を形成している様子が時折観察されました。この菌叢の形は，これらが子実体から脱分化した栄養菌糸体によって形成されたものと考えられました。これは有性繁殖のための子実体が栄養繁殖にも関係していることを示

します。またコウヤクタケ科の菌が基物の枯枝と共に地上に落ち、接触した落葉上に菌叢を形成している様子がしばしば観察されました。さらに、基物の枯木から離れて地上に落ちたサジタケが、子実体の傘裏面と接する落葉上に菌叢を形成しているのが観察されました。この菌叢はその形から落下した孢子群が発芽して形成されたものと考えられます。上記の後2例は木材腐朽菌の菌糸による落葉への侵入を示すものですが、これらが落葉分解菌との競争において定着し得るのか、また落葉の分解にどの程度貢献しているのかは今後の興味深い課題です。

キノコの地方名

紀伊大島ではキノコが少なくとも111種も記録されているのにもかかわらず、その地方名はあまり豊富とはいえません。紀伊半島の山岳地帯や温帯のブナ帯とは異なり、暖温帯の紀伊大島では、キノコ類と人間生活との関係はあまり濃厚ではないようです。紀伊大島の地方名採取事例を列举すると、「しーたけ」(シイタケ)、「きくらげ」(アラゲキクラゲ)、「さるのこしかけ」(コフキサルノコシカケなど)、「ちどめ」(シロツチグリ、エリマキツチグリ)です。こうしたキノコ類を総称して「きのこ」と称しています。有毒なキノコ類があるのは周知しているのですが、具体的にどれが有毒なのかは把握していないのです。日常的にあまりキノコ類には関心はないと言えましょう。

キノコの民俗分類学

「しーたけ」は、ホダ木で栽培されるシイタケのことを原則として意味します。野生や自生のシイタケのことも知っているのですが、わざわざそれを取りに行くことはないのです。生シイタケも料理素材となりますが、料理の基本は干しシイタケです。「しーたけ」のアクセントは「し」にあります。シイタケでは、地方名が意味する種類概念と分類学の種がほとんど一致しています。

「きくらげ」は、山野に自生するアラゲキクラゲのことです。アクセントは「き」にあります。一部の住民は、不定期にアラゲキクラゲを山取りして、乾燥して貯蔵しておくようです。適宜、水戻しして食用とします。しかし、シイタケとは異なり、普通なおかず用の料理素材とは言い難いのです。店先で売られているキクラゲと識別は特にしていないようです。この場合は、次の「ちどめ」と同様に、地方名称が分類学の属レベルに相当するとみなせます。

「ちどめ」は、開けた場所に自生するシロツチグリやエリマキツチグリに相当します。止血剤として使う人もいます。アクセントはなく、平板的に発音されます。

「さるのこしかけ」は、枯死樹木などに腐生するコフキサルノコシカケのことを意味するようですが、タコウキン科の他種やマンネンタケ科の種をも包含する広い言葉です。すなわちこの名称は、原

則としては種に相当しますが、広義では科名かそれ以上の群にも相当します。このキノコ類は飾りとして使われるほか、頭痛薬などにも使われるようです。第1アクセントは「さ」に、第2アクセントは「こ」にあります。

須江や檜野地区では、「はったけ」という呼称が採取されますが、その正体は未確認です。アクセントは「は」にあります。

そのほかにも色々なキノコが島内にあることは認識しているのですが、特に名前は宛てられていないのです。発生していた場所や樹木、形状を解説し、指示代名詞を用いながら「きのこ」と呼称するのです。

食文化とキノコ

紀伊大島住民とキノコ類との非濃密な関係を、山野菜の旬採取行動と比較してみしましょう。紀伊大島に自生する「つわ」（キク科ツワブキ、アクセントは「つ」）や「ごんぱち」（タデ科イタドリ、アクセントは「ごん」）、ワラビ（アクセントは「わ」）、ゼンマイ（アクセントは「ぜ」）、ヨメナ（アクセントは「よめ」）には、それぞれ山取りの旬があります。したがって、その季節が来ると心が落ち着かなくなります。そうした食衝動は、魚類についてはさらに顕著です。しかし、キノコ類にはそのような季節感はないようです。その点、「まったけ」（マツタケ）は、季節の風物詩であるとは思っているよう



コフキササルノコシカケ

です。しかし、マツタケが紀伊大島に自生しないためか、山菜や魚のような食衝動はありません。

最近では物流の発達で、さまざまなキノコ類が日本全国津々浦々の販売店で入手できるようになりました。また、新聞やテレビなどのマスコミ情報の浸透によって、ワールド・ワイドな有用キノコ情報が知られるようになりました。紀伊大島でも民宿を営む家を中心に、数種の栽培キノコが食されています。森から伐採したスダジイを使い、購入した種菌を打ち込んでシイタケのホダ木栽培も行われます。時には他のキノコの試栽培も半ば趣味的に行われます。余剰な栽培キノコは、袋詰めされて無ラベルで道路際の無人販売店で提供されることもあります。しかし、キノコが伝統的および準伝統的な食生活の必要不可欠な一部となったと言いつてもいいと思います。

このように、紀伊大島の事例は、照葉樹林帯や南接する亜熱帯地域におけるキノコ類と人間との関係係を考察する上で、ブナ帯のそれと比較して興味深く思われます。基礎的な民族（民俗）菌類学的

地域調査を地道に重ねていくことが必要です。

(梅本信也・種坂英次)

紀伊大島キノコリスト

担子菌亜門 BASIDIOMYCOTINA

真正担子菌綱 EUBASIDIOMYCETES

帽菌亜綱 HYMENOMYCETIDAE

ハラタケ目 AGARICALES

ハラタケ科 AGARICACEAE

ウスキモリノカサ

ナカグロモリノカサ

テングタケ科 AMANITACEAE

タマシロオニタケ

コタマゴテングタケ

ドウシントケ

クロタマゴテングタケ

シロオニタケモドキ

テングタケ

コテングタケモドキ

カバイロコナテングケ

ヘビキノコモドキ

シロオニタケ

オキナタケ科 BOLBITIACEAE

ネナガコガサタケ

ハタケコガサタケ

イグチ科 BOLETACEAE

ヌメリコウジタケ

ツブエノウラベニイグチ

キニガイグチ

モエギアミアシイグチ

クロニガイグチ

ミドリニガイグチ

イロガワリキヒダタケ

ウツロイグチ

ヒトヨタケ科 COPRINACEAE

キラタケ

イタチタケ

ムジナタケ

フウセンタケ科 CORTINARIACEAE

アブラシメジ

カワムラフウセンタケ

ウスムラサキフウセンタケ

ニセアブラシメジ

アカササタケ

オオキヌハダトマヤタケ

タマアセタケ

チャヒラタケ科 CREPIDOTACEAE

ヌメリガサ科 HYGROPHORACEAE

ベニヒガサ

ベニヤマタケ

アキヤマタケ

アカヌマベニタケ

ヒラタケ科 PLEUROTACEAE

ウスヒラタケ

イッポンシメジ科 RHODOPHYLLACEAE

トガリウラベニタケ

フタツミウラベニタケ

シロイボカサタケ

ウスキモミウラモドキ

ベニタケ科 RUSSULACEAE

アシボソチチタケ

クロチチタケ

ムラサキカスリタケ

カワリハツ

クロハツモドキ

ドクベニタケ

クロハツ		コウヤクタケ科	COTICIACEAE
ニセクロハツ		ウロコオクバタケ	
ケショウハツ		シロコメバタケ	
スエヒロタケ科	SCHIZOPHYLLACEAE	シロソウメンタケ科	CLAVARIACEAE
スエヒロタケ		ムラサキホウキタケ	
オニイグチ科		ベニナギナタタケ	
	STROBILOMYCETACEAE	シラウオタケ	
アシナガイグチ		マンネンタケ科	
キクバナイグチ			GANODERMATACEAE
コオニイグチ		マンネンタケ	
モエギタケ科	STROPHARIACEAE	ラッパタケ科	GOMPHARIACEAE
センボンイチメガサ		シロアンズタケ	
キシメジ科	TRICHOLOMATACEAE	タバコウロコタケ科	
ヤグラタケ			HYMENOGHAETACEAE
ヒメキシメジ		オオタバコウロコタケ	
シロヒメカヤタケ		ダイダイタケ	
エセオリミキ		サジタケ	
モリノカレバタケ		アズマタケ	
ワサビカレバタケ		ネンドタケ	
ダイダイガサ		シワタケ科	MERULIACEAE
ウラムラサキ		カワシワタケ	
カレバキツネタケ		タコウキン科	POLYPORACEAE
シイタケ		シツクイタケ	
アシグロホウライタケ		アラゲカワラタケ	
クヌギタケ		センベイトケ	
サクラタケ		カワラタケ	
ヒメチシオタケ		コフキサノコシカケ	
ヒダサカズキタケ		オオスルメタケ	
ヌメリツバタケ		ブドウタケ	
スギエダタケ		ヒロハノキカイガラタケ	
キヒダマツシメジ		フルイタケ	
ヒダナシタケ目	APHYLLOPHORALES	ウチワタケ	
アンズタケ科	CANTHARELLACEAE	アオゾメタケ	
アンズタケ		シイサルノコシカケ	
ミキイロウスタケ		ヒイロタケ	
クロラッパタケ		ホウネンタケ	
		アナタケ	

クジラタケ
 シロカイメンタケ
 ホウキタケ科 RAMARIACEAE
 ハナホウキタケ
 ニクハリタケ科 STECCHERINACEAE
 ニクハリタケ
 ウロコタケ科 STERACEAE
 キウロコタケ
 チャウロコタケ
 モミジウロコタケ

腹菌亜綱 GASTEROMYCETIDAE
 ホコリタケ目 LYCOPERDALES
 ヒメツチグリ科 GEASTRACEAE
 シロツチガキ
 エリマキツチグリ
 ホコリタケ科 LYCOPERDACEAE
 ノウタケ
 ホコリタケ
 スッポンタケ目 PHALLALES
 アカカゴタケ科 CLATHRACEAE
 サンコタケ
 スッポンタケ科 PHALLACEAE
 キツネノエフデ
 スッポンタケ
 ケシボウズタケ目 TULOSTOMATALES
 クチベニタケ科 CALOSTOMATAACEAE
 クチベニタケ

異型担子菌綱

HETEROBASIDIOMYCETES

キクラゲ目 AURICULARIALES
 キクラゲ科 AURICULARIACEAE
 アラゲキクラゲ
 アカキクラゲ目 DACRYMYCETALES
 アカキクラゲ科 DACRYMYCETACEAE
 ハナビラダクリオキン
 ツノマタタケ

子囊菌亜門 ASCOMYCOTINA

盤菌綱 DISCOMYCETES
 チャワントケ目 PEZIZALES
 ピロネマキン科 PYRONEMATACEAE
 ヒイロチャワントケ
 ベニチャワントケ科 SARCOSCYPHACEAE
 ベニチャワントケモドキ

核菌綱 PYRENOMYCETES

クロサイワイタケ目 XYLARIALES
 クロサイワイタケ科 XYLARIACEAE
 ヒメアカコブタケ
 クロコブタケ

(種坂英次・梅本信也)

紀伊大島の昆虫

紀伊大島は、ほぼ紀伊半島最南端に位置し暖流黒潮の影響を受けています。そのため、島の昆虫相には南方系要素が含まれるのは当然ですが、案外にも数多くの森林系要素を含んでいます。しかし、島には比較的状态の良い森林が残されていますが、樹木種数は少ないので、島という地勢もあいまって、昆虫相は紀伊半島よりは単純だと考えられます。ただし、高等植物とは異なり、大部分の昆虫相は明らかにされていません。今後の詳細な調査と検討が必要です。以下に、現在までに明らかにされていることをグループ別に紹介します。

チョウ類

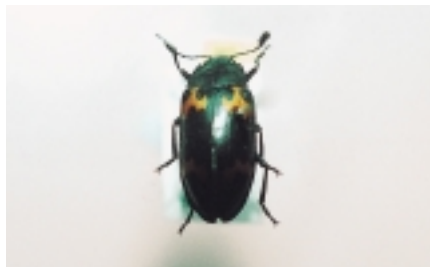
紀伊大島のいたる所で観察される大型チョウとしては、モンキアゲハやアオスジアゲハ、クロアゲハ、アゲハチョウ、ミカドアゲハがあります。これらは島に生育する植物に寄生しています。畑地が少ないためか、モンシロチョウやキチョウは稀です。訪花・吸蜜性のイチモンジセセリはかなり多く見られます。これは幼虫が食草とするイネ科植物が島内に多いからと考えられます。



アオスジアゲハ
クスノキ科植物の葉を食べる（写真：吉田元重）

甲虫類

フタイロカミキリモドキやニホンホロビロコメツキムシが観察されます。いずれも南方系です。春にカタツムリを食べるヒメボタルが少数ながら出現します。防風林として植えられているサンゴジュにサンゴジュハムシが、ヤマノイモ科のヤマノイモやヒメドコロにはヤマノイモハムシが食害しているのが見られます。シイ類の枯木には山地性のキノコムシが



タイショウオオキノコムシ
スダジイのキノコに発生する（写真：吉田元重）

生息します。コクワガタは普通に見られますが、クワガタムシやカブトムシは少なめです。タブノキは多く分布しますが、森林全体が安定しているために、タブノキを加害するホシベニカミキリの個体数は少ないようです。動物の死骸や糞の掃除屋のエンマコガネ類也多めです。訪花性のドウガネブイブイやアオハナムグリ類の種数は控えめです。

ゴキブリ類

枯木の樹皮下には黒いオオゴキブリやサツマゴキブリが潜みます。森林にはモノチャバネゴキブリやウスヒラタゴキブリが数多く棲んでいます。

バッタ類

ほとんど調査されていません。ただし、南方系のサツマヒメカマキリは周年見られます。

トンボ類

紀伊大島は止水性のトンボが多く、流水性のものは少ないようです。

水田の周辺には春からシオヤトンボが



「トウンボ」という坪池は水生昆虫の宝庫

現れ、やがて、シオカラトンボやオオシオカラトンボに移行します。ハラビロトンボも少なくありません。クロスジギンヤンマやギンヤンマは小さな水溜りでも発生しています。キイトトンボやオツネントンボなどのイトトンボ群は水田の周囲に飛翔します。ニシカワトンボなどのカワイトトンボ群も見られます。

カメムシ類

手に触れると悪臭を放つカメムシ類は紀伊大島の森や田畑・草原など、いたる所に生育しています。カメムシ類は樹液を吸うための針状の口をもちます。夜の街灯に集まる緑色のカメムシはチャバネアオカメムシやアオクサカメムシで、海岸に生えるハマウドやアンタバの花にはアカスジカメムシやクサギカメムシなど多数のカメムシ類が見られます。ホソハリカメムシやホウズキカメムシは畑地の害虫です。水面をスイスイ泳ぐアメンボ、逆さま泳ぎのマツモムシ、アブラゼミやクマゼミはすべてカメムシの仲間です。

ハチ類とハエ類

ほとんど調査されていません。今後の研究が必要です。

(吉田元重)

大森山の鳥類

紀伊大島は紀伊半島最南端の串本町潮岬の1.5km東沖に位置します。島の面積は9.92km²で周囲が28.0kmです。地形は南に向かってやや傾斜した台地状、土壌は風化の進んだ熊野酸性岩です。島には暖温帯常緑広葉樹林や里域林が広がっています。状態の良い林は島の北部にある急崖に隣接した魚付林と島の中央部にある標高171.7mの大森山周辺などにまとまって残存しています。大森山周辺では、非海岸性の鳥類が意外に豊富で早朝から夕刻まで多種多様なさえずりが熟聴できます。

ここでは、2000年2月から翌年2月までの詳細な鳥類観察記録（一部は4月まで）と1990年からの主要な種の行動観察メモをもとに、大森山南東麓に所在する京都大学フィールド科学教育研究センター紀伊大島実験所（旧亜熱帯植物実験所）とその周辺の鳥類についてまとめておきます。

観察地の概要

調査地である紀伊大島実験所は、紀伊大島のほぼ中央にある大森山南東麓斜面（北緯33度28分、東経135度50分）に位置します。施設面積は11.75haで起伏に富み、そのうち約8haが暖温帯常緑広葉



ホオジロ（写真：羽谷啓造）

樹種と一部はスギ・ヒノキを含む山林です。この周辺の林分は元々薪炭林であり、今でもその面影をタコ足状のスダジイ萌芽株に見ることができます。1937年（昭和12年）に当時的大島村から京都帝国大学に敷地の寄付を受けて以来、とくに広葉樹林区画は樹高も約20mに達し、よい樹相を示しています。高中木層はスダジイ、ヤマモモ、タブノキ、ヤブニッケイ、クスノキ、ヒサカキ、カクレミノ、キブシなどから成り、林床にはそうした実生のほかにアオノクダケラン、ハナミヨウガ、センリョウ、テイカカズラ、コクランなどが分布します。

所内の道沿いには、ハクサンボク、ピラカンサ、多数のツバキ園芸品種や花梅品種（京都大学紀伊大島実験所、2000；2003）、マルバチシャノキ、オガタマノキ、フェイジョア、フウ類、ヤシ類などの導入樹種も多数あります。果実の成熟

期には、これらの植物は恰好の食餌を提供しています。林内の腐朽した枝や幹には、カワラタケ、カイガラタケ、スエヒロタケ、シイタケなどが発生し、その基部には餌となる幼虫が生息します。さらに、建物周辺とウメ品種圃、ツバキ品種圃、柑橘品種圃林床などはシバまたは草生植被となっており、深さの異なる多数の貯水池もあります。所内は無農薬で運営されています。島民によると、戦前には実験所周辺でも鳥道に張った地獄網（霞網）による山鳥狩猟や広葉樹の葉表面に生虫付き釣り針を仕掛けて行うメジロやウグイスの捕獲が、食糧確保と換金のために盛んに行われたとのことですが、現在では鳥達にある種の楽園を実験所は提供していることになります。なお、実験所敷地全体が国立公園第1種普通地域、和歌山県鳥獣保護区にそれぞれ指定されています。



キジの卵

観察の方法

実験所とその周辺を対象に、1990年からメジロやヒヨドリなど判別しやすい鳥の採餌観察を主に行い、2000年2月から約2年間は、種多様性に重点をおいた調査を行いました。ただし、調査は定点法とかトランセクト法といった系統だったものではなく、あくまでも気づけば記録という手法です。鳥種の同定は、肉眼観察と一部は撮影写真によって高野伸二（1989）と真木・大西（2000）に基づき、広義に行いました。鳥類目録に使用した学名は、命名者名を省略して日本鳥学会（2000）「日本鳥類目録改訂6版」に準拠しました。確認された鳥類は21科33種でした。営巣はキジ、メジロ、ホオジロで確認されました。20世紀半ば頃の紀伊大島では、メジロは本土からの渡り鳥でした。この半世紀に何が起こったのでしょうか。

（梅本信也・羽谷啓造）

紀伊大島大森山南東麓の鳥類リスト

コウノトリ目 CICONIIFORMES

サギ科 Ardeidae

アオサギ *Ardea cinerea*

タカ目 FALCONIFORMES

タカ科 Accipitridae

トビ *Milvus migrans*

ノスリ *Buteo buteo*

ハヤブサ科 Falconidae

ハヤブサ *Falco peregrinus*

キジ目 GALLIFORMES

キジ科 Phasianidae

キジ *Phasianus versicolor*

チドリ目 CHARADRIIFORMES

シギ科 Jacanidae

ヤマシギ *Scolopax rusticola*

ハト目 COLUMBIFORMES

ハト科 Columbidae

キジバト *Streptopelia orientalis*

アオバト *Sphenurus sieboldii*

カッコウ目 CUCULIFORMES

カッコウ科 Cuculidae

カッコウ *Cuculus canorus*

ツツドリ *Cuculus saturatus*

ホトトギス *Cuculus poliocephalus*

フクロウ目 STRIGIFORMES

フクロウ科 Strigidae

フクロウ *Strix uralensis*

アマツバメ目 APODIFORMES

アマツバメ科 Apodidae

ヒメアマツバメ *Apus affinis*

キツツキ目 PICIFORMES

キツツキ科 Picidae

コゲラ *Dendrocopos kizuki*

スズメ目 PASSERIFORMES

ツバメ科 Hirundinidae

ツバメ *Hirundo rustica*

セキレイ科 Motacillidae

キセキレイ *Motacilla cinerea*

ヒヨドリ科 Pycnonotidae

ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis*

モズ科 Laniidae

モズ *Lanius bucephalus*

ツグミ科 Turdidae

ルリビタキ *Tarsiger cyanurus*

ジョウビタキ *Phoenicurus aureoreus*

イソヒヨドリ *Monticola solitarius*

トラツグミ *Zoothera dauma*

シロハラ *Turdus pallidus*

ツグミ *Turdus naumanni*

ウグイス科 Sylviidae

ウグイス *Cettia diphone*

ヒタキ科 Muscicapidae

オオルリ *Cyanoptica cyanomelana*

シジュウカラ科 Paridae

ヤマガラ *Parus varius*

メジロ科 Meliphagidae

メジロ *Zosterops japonicus*

ホオジロ科 Emberizidae

ホオジロ *Emberiza cioides*

アオジ *Emberiza spodocephala*

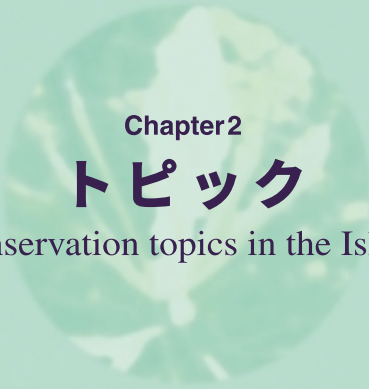
カラス科 Corvidae

ハシボソガラス *Corvus corone*

ハシブトガラス

Corvus macrorhynchos

(梅本信也・羽谷啓造)



Chapter2

トピック

Conservation topics in the Island

樫野魚付林の歴史と保全

魚付林は、河川や海などに面する山林のなかで、魚類の寄り場として木の伐採を禁じたものを指します。森林法第25条と言う保安林のなかで第八項の「魚つき」の区分です。魚付林は魚類の過敏な視覚刺激を抑制し、多種多様で豊かな餌源やリターなどからのフルボ酸鉄などを安定的にそして連続的に供給し、魚介類の持続的繁殖を確保すると考えられます。地方によっては、魚付場とか魚寄林、魚隠林、魚隠山、魚著山、網代山、網代黒山などと呼びました。黒山という地名は植物が黒く旺盛に繁茂した場所を表すので、樫野地区の黒山はまさに魚付林の典型と言えるでしょう。海崖の突出部分とその近傍は黒鼻と言われて良好な漁場であり、磯釣りのメッカでもあります。

樫野魚付林

黒山は、樫野地区の北西、内海といわ



黒 山

れる串本湾に北面する海蝕崖からやや内陸までの字で、その南側に字棹取平三が県道まで続きます。後者は通称サトリ山とかサトリ園あるいは里利といわれます。いずれも母岩は潮岬火成複合岩体からなり流紋岩質火砕岩層と貫入岩類が卓越、一部は泥岩層が指交します（地質の項や植生の項も参照）。黒山の土壌は紫蘇輝石流紋岩や紫蘇輝石石英流紋岩が風化したものです。貫入岩類の内部は柱状節理が発達しているとされ、もしも本当ならばその構造は森林根系空間の確保には好適でしょう。ちなみに、串本湾の古座よりには黒島があり、今は九龍島と呼ばれています。ここも狭小な島ながら鬱蒼とした林を戴冠しています。九龍島と黒山、さらに白島が、古座川狭の一枚岩や橋杭岩に見られるような壁状の貫入岩体の走向と並行でかつ一直線であるのは偶然ではなく、母岩の類似性に起因するものでしょう。こうした配置も、鳥類による黒山林の形成に関係していると思われます。

気象条件は、暖流黒潮の影響を受けて温暖です。付近の気象を潮岬測候所の観測資料から類推しますと、年平均気温は17℃前後、降水量は2600mmを越えると推測されます。冬季には串本湾を北西

風が渡りこの区画に衝突するため、ハマヒサカキが卓越する風衝林景観を呈する部分もあります。

江戸までの歴史

江戸時代よりも以前の^{あざ}榎野地区字黒山の植生については資料が全くないのですが、おそらくは榎野や須江地区の住民もほとんど利用をしていなかったと思われます。その一方、紀伊半島側の良好な磯や薪炭林を持たない西向浦（古座浦）および高川原浦の漁民がしばしば黒山から弁天崎（榎野崎）に至る地帯を訪れて、倒木や流木を入手していたと推測されます。この頃は、マツによる積極的な防風林はなく、スダジイやタイミンタチバナ、タブノキが卓越する林であったでしょう。時には、風倒木や枯死木が薪炭利用されていたと思われます。経験的には黒山周辺の魚付林機能は理解されていたと考えられます。

江戸初期前後に、榎野地区が以前の地下田から現在の場所に移転しました。その結果、周辺の生物資源利用平衡が崩れ、内海海面では明治初期にまで続く網代紛争が、磯では魚介類の採取権論争、波打ち際には流木の利用権紛争、さらに魚付林部では利用権論争が起りました。榎野が悪いといっているものではありません。榎野地区文書の通りであるならば、江戸初期後半から人工マツ林分がスダジイ林に加わりました。網代を守る黒山の機能が関係する浦には理解されていたのでし

ょう。おそらく、立木伐採はなかったのですが、風倒木とか枯死木は積極的に採取されて利用されていたと推測されます。江戸時代には、内外の船が紀伊大島に立ち寄り飲料水の補強と薪炭の積み込みを行いました。破壊的な伐採事件は少なかったと考えられます。

明治以降

明治時代に入り魚付林という言葉が旧森林法で明確に記載され、明治33年に永代伐採が榎野黒山周辺で宣言されると魚付林の醸成がさらに進行しました。その結果、「神ノ木」といわれる位に生長したマツの太木、独特の樹冠を形成するスダジイやタブノキ林が出来上りました。対岸の古座町^{おおあざ}大字姫には松原がありましたが、幕末に紀州藩が用材調達のため抜伐され、悪木が残存するだけとなった過伐採マツ林とは対照的でした。さらに、これらの樹幹をシラタマカズラなどの亜熱帯性植物が倚根攀生し、林床にはアオノクマタケランの大群落が形成され、島の隔離作用が相まって植物地理学的に興味深い森林ともなったのです。



魚付林の樹冠

第二次世界大戦中は食糧不足のためにややスダジイ果実の採取負荷が増加しましたが、それでも魚付林を保全するという地区の掟は守られました。

戦後から現在

戦後は^{あぶ}字棹取平三の開拓が進み^{あぶ}字黒山の直近まで果樹園となりましたが、防風林としての機能を魚付林に依存したためと、地区の伝統的掟のために永代伐採禁止は継続したのです。

1950年代以降は、マツがマツノザイセンチュウによって壊滅的な打撃を受けて絶滅し、江戸初期以来、久々のスダジイ・タイミンタチバナ・タブノキ林となりました。これは一見すると自然の極相林を呈するものでした。

2003年現在でも、スダジイは着実に成長を続けて樹齢も少なくとも百年以上になっていると推定されます。黒山周辺は種多様性のツボとして、そして法的には魚付保安林として十分に保護されているようです。

魚付林の保全

日本各地には、江戸幕府、明治政府さらには戦後の新政府など度重なる政体の変化を乗り越えてきた土地区画があります。それは入会地といわれる土地区分です。その間、関係する所有民または利用民によって種々のルールが形成され、持続的な利用と生物多様性の保全という相反するようなカテゴリーの両立が歴史的

になされてきました。魚付林もそうした例の一つです。その森の中で、他には見られないキノコ相も醸成されてきたと考えられます(キノコの項、参照)。

最近、漁場や河川と一体となって魚付林の意義が見直され、各地の水産業関係者による再生や保全が積極的になされるようになってきました。なかには、魚付林をグリーン・ツーリズムのなかに位置づけている自治体もあります。もちろん魚付林が本当に魚付く機能を持ち合わせているのかは、昭和初期からの論争に見えるように、不明な点多々あります。しかし、完全に解明されるまでは、魚付林は保全しなくても良い論理は成り立たないのです。根拠薄弱な考え方に基づく保全方法よりも、長期のフィールド・テストに耐えた民間の資源管理方式が勝っているです。鬱蒼とした魚付林景観のもとで、網代操業する方が精神的によいのは誰にも理解できることです。護山と護海と護族と娯楽が調和していた方がよいのです。



スダジイの
根萌芽

地元の方々は、老若問わず伝統的に魚付林の意味を理解しています。しかし、諸事情で過疎化し、将来に於いて魚付林の真の理解をしなくなる事も十分あり得ます。そうした場合、魚付林などの共有空間が持つ生物多様性保全機能を維持していくにはどうすればよいのでしょうか。

(梅本信也・種坂英次)

ハクサンボクの教訓

ハクサンボク *Viburnum japonicum* (Thunberg) C.K. Sprengel は、スイカズラ科の木本で本州の伊豆半島・伊豆諸島・愛知県・山口県、九州、琉球の海岸から標高 500m (時に 800m) 間での暖温帯林に生えます。

紀伊大島には、1941 年春に大阪府三島郡磐手村大字古曽部 (現在の高槻市古曽部町) にあった京都帝国大学農学部附属摂津農場附属古曽部園芸場温室からハクサンボク 4 株が持ち込まれ、当時の同学農学部大島暖帯植物試験地 (現在の京大フィールド科学教育研究センター紀伊大島実験所) 開墾後の敷地中央部 (北緯 33 度 28 分、東経 135 度 51 分、標高 90m) に移植されました。その後、本種は剪定など人為的攪乱を受けながらも個体数を増加させ、2003 年現在では実験所内に普通に生育しています。

ハクサンボクは年末頃から樹端部葉腋



ハクサンボクの花

の冬芽を伸長させはじめ、1～2 対の対生葉を付けた後、4 月頃に散房花序を枝先に付けて極めて多数の白色小花を咲かせます。開花期には悪臭ともとれる独特の匂いを放つため訪花昆虫が多く見られます。その後、果実 (液果) の成熟とともにある程度は枝の節間が伸長し、秋を迎えることになります。

資源利用

ハクサンボクは、現在では原産地だけでなくそれ以外の地方でも庭園樹として利用されており、人為分布限界の関東地方の群馬や埼玉、茨城県の公園でも実付きは悪いのですが、しばしば栽植されています。近畿地方では、もっぱら庭園樹として栽植される程度ですが、熊本県人吉地方では、自生する本種の果実の赤色が同属のガマズミと共に「いせび」と呼称されて民芸品「きじ馬」の染色料として用いられています。

移入史

1941 年春に大阪府三島郡磐手村から和歌山県東牟婁郡大島村の大島暖帯植物試験地 (現在の京大実験所) に須江白野港経由で合計 4 株のハクサンボクが持ち込まれました。上原 (1961) が本種を「本

州(長門)九州,台湾の産。原産地では庭樹とするが他の地方にまで送られて庭樹とするは見聞したことなし」と表現したように、当時は台湾や九州に自然分布するハクサンボクが近畿では温室でしか育成できないだろうという常識があり、こうした背景から温暖な紀伊大島に順化育成の可能性を当時の兼任教官並河功が検討したと推察されます。そのころ、試験地内には車道はなく、山道が照葉樹林内の中をうねうねと敷地中央部まで達していました。建造物としては作業小屋があるだけでした。1943年8月には、木造の事務所兼宿舍が増築されました。元職員関係者からの聞き取りによりますと、こうした建物近くにハクサンボクが定植されたのですが、移植位置に関する記録はありません。

第2次世界大戦が激化し、敗戦後も施設そのものが永らく放置されました。1955年前後から、敷地内の復興作業が本格化されました。附属亜熱帯植物実験所と改称後の1968年から1970年には、正門入り口から中央部に至る主幹道路を幅3mに拡幅・舗装し、ガラス温室群、木造官舎、コンクリート平屋立ての事務兼研究棟を新築する一方、木造の事務所兼宿舍を木造官舎近くに移築しました。その中で高槻市の京大古曽部温室から赴任した第1代専任教官の瀬川弥太郎氏は園芸の専門家でした。彼はハクサンボクの園芸的価値を重視し、研究棟周辺の道路沿いや正門からの主幹道中間地点、官舎

周辺に生け垣や展示用として栽植したようです。現在の研究棟や木造官舎付近に30年齢を越えるハクサンボクが数多く分布しています。これらは当時の栽植個体の直接の子孫である可能性があります。

各種散布による拡大

ハクサンボクは頂生的な散房花序に毎年多量の果実を生産し、晩冬に赤く成熟します。成熟した果実は大変発芽しやすいのです。時に風散したり、重力落下する果実もあるでしょうが、花序の果実のほとんどが翌春までにヒヨドリなどの訪果鳥類の餌となります。食べられたハクサンボク果実は果肉をこそぎ取られた後、ペリットとして道路や休息場所に吐き出されています。1ヶ所に数個、ときに7, 8個ものハクサンボク種子が含まれます。道路に落ちた種子は強雨の時に流されて道路沿いに定着の機会を窺います。移動しながらヒヨドリ達は大量の種子の雨を所内に降らしてきたでしょう。その一方で、道路沿いのハクサンボクの列生えがしっかりしてくると、これに沿った鳥の移動が増加し、列生えに一層の



ハクサンボクの果実

拍車をかけ、「鳥道」を強化します。ヒサカキ樹（特に雌株）の株もと付近でハクサンボクがしばしば見られるのは、ヒサカキ樹を訪問する鳥の行動と関係していると思われます。

下の図を見ますと、40年齢が1個体と少ないのですが、その後は徐々に個体数を増やしています。ところが、1968～1970年頃に所内で大規模な土地形状の改変があったために、その年次の実生個体が定着できなかったようです。こうした事情が第2のピークと関連しているでしょう。

その後、ハクサンボクの分布拡大は進行します。しかし、1980年～1983年までは、2階建ての宿泊棟などの建設による土地の改変がありました。このために、一旦は新たな定着個体数が減りました。これが図における第1のピークと関連しています。

1985年代半ばからは、人員削減のために草刈りなどの管理業務が機械化され、鎌作業による細かい植生管理が不可能となりました。その結果、道路沿いにおける従来通りの実生の定着が困難にな

りました。また、実生の定着数の低下には林を構成する樹種の高木化と樹冠の鬱閉化も関係しています。

人為移入と生態保全

ハクサンボクは生長が早く大量の果実を付け、餌不足となる初春には好適な食糧となるので、ヒヨドリなどによって大いに食されて種子が散布されます。しかし、これが無秩序な繁殖と分布拡大につながるのです。ハクサンボクは美しい花と果実を付けるので、それに目が奪われてしまいがちですが、過繁殖は林分構成の適切な管理の観点からは等閑視できません。ハクサンボクがこれ程施設内に広がることは、移植当時には想定されていなかったのです。

移入後の個体数変動に関する無想定や誤算は、無責任な放流、放鳥やフィードバックのない生物保護にもよく見られる現象です。また、種が同じで遺伝子構成が異なる外来個体群の導入も在来遺伝子構成に影響を与え、バイオハザードにつながります。さらに在来種と移入種間に遺伝子流動があり、かつ、系統純血主義を主張する場合には、移入は深刻な社会問題を引き起こします。こうしたことを踏まえると、植物の人為的移入を行う場合には、生態系に対する影響を幅広い立場から俯瞰し、みんなで検討する余裕が重要です。

（梅本信也）

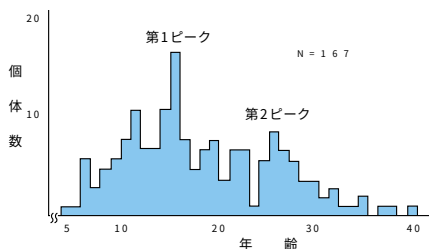


図 個体年齢と個体数の関係
(梅本ら, 2002)

タカサゴユリの秘密

ユリ科のタカサゴユリ *Lilium formosanum* Wallce は、ササユリ、オニユリとともに紀伊大島に普通に見られます。タカサゴユリは、台湾などの南方原産です。もともと紀伊半島や紀伊大島にはほとんど無かったのです。しかし、この10～20年の間に徐々にその数を増して来しました。

紀伊大島でのタカサゴユリは、基本的に多年生です。地上部が枯れたように見えても地下部にはユリ根といわれる鱗茎を持っています。地下部に蓄えたエネルギーを使って春先に急速に地上部を伸ばし、1個または多数の上品で華麗な花を咲かせます。花卉が散った後に種子が形成され風や重力によって散布されます。ときにはヒヨドリなどが種子を食べに来ます。散布された種子はその後容易に発芽しますが、それが冬だと途中で枯死します。しかし、暖かい季節だとそのまま育ちます。早いものだと一年で成植物となり開花します。そして、大量の種子をつくって増えていきます。たった1個体でも種子を付けていることから判断して、自殖もできるし、他殖も可能と思われます。静岡県調査では、それが支持されています(日本雑草学会、2003年)。



タカサゴユリ

生活史の変化とその理由

タカサゴユリの開花時期は、普通は初夏から夏でしたが、最近は季節感が無くなってきました。極端な場合は真冬にも咲くことがあります。タカサゴユリに何か起こっているのでしょうか。分布の拡大や四季咲き化が何故起こるのでしょうか。

これを説明するための理由は少なくとも3つ考えられます。

まず、突然変異です。タカサゴユリが南方からやってきた後、何らかの理由で遺伝子の突然変異が起こり、はびこる性質が増大したという考え方です。突然変異の結果、四季咲きとなったり、自殖性が高まった可能性があります。たおやかな野生植物が荒々しい雑草となったというわけです。

次に考えられるのは、生育地の性質の変化です。タカサゴユリが生えている場

所を見ると、安定したところではなくて、ときどき草刈りが行われたりするようなところ。こうした場所を攪乱地といいます。タカサゴユリは適度な攪乱地に分布しています。このことから、戦後の里域植生の管理方式が変わったのではないかと考えられます。

紀伊大島では、スキヤチガヤが丁寧に刈り取られて利用されてきましたが、植物を選んで除草するようなこまめな管理はしにくくなってきています。

さらに考えられるのは、紀伊大島を含

む紀伊半島の気候の温暖化です。紀伊半島の古座川筋では、20－30年前から冬の氷柱とか川の氷結が無くなったといいます。タカサゴユリはもともと南方性ですから、住み易くなったということになります。

しかし、タカサゴユリのはびこる真の原因はまだ分かっていませんが、日頃の身近な植物の観察に地域の歴史を絡ませることで、自然および社会環境の変化を学び取ることが可能なのです。

(梅本信也)



キンカン園に出現したタカサゴユリ

ハマダイコンの謎

ハマダイコン *Raphanus sativus* L. var. *raphanistroides* Makino はアブラナ科の草本で、日本列島、硫黄島、大韓民国、台湾の海岸に分布するほか、東北地方の内陸部と琵琶湖湖岸にも生育が見られ、数個体から数十万個体から成る集団を形成します。本種は砂地の富栄養で人間活動の影響を受けやすい、いわゆる ruderal な生育地に多く見られ、里域の浜辺や漁港風景にかかせない要素の一つです。本種の成熟した莢は浮遊性で、水散布されます。本種の葉や花弁色は、たいへん変異に富みます。

葉の変異

ハマダイコンの成葉は栽培ダイコンの葉のように羽状全裂するのが普通で、このような葉形を持つ個体は厳密に pinnatifid 型と呼ばれます。この型以外に葉が丸く羽状全裂片がほとんどなく、かつ頭羽状で切れ込みのない葉をもつ lyrate 型 (図の左) や、あたかもニンジンまたはミブナの葉のように、再羽状に深裂する葉をもつ pinnatisect 型 (図の右) の存在が認められています。

本種の葉型の遺伝子多型における lyrate 型の集団内頻度は、日本列島の高緯度地方や北陸地方で高くなり、串本地



ハマダイコンの葉
lyrate 型 (左) と pinnatisect 型 (右)

方を含む西南暖地や琉球では低くなるという分布パターンを示し、lyrate 性は劣性です。こうした地理的勾配の原因は、現在のところは未解明ですが、中国大陆からの史前以来の移住効果が関係していると考えられます (山口裕文博士、私信)。

一方、一瞥するとニンジン葉のような pinnatisect 型は、国内では紀伊半島南端の串本町と九州の国東半島、国外では大韓民国の済州島に限定され、集団内にきわめて低頻度に観察されます (山口博士、私信)。この葉の形態特性は優性遺伝子に支配されるようですが、トランスポゾンが関係している可能性もあります。

ハマダイコンは攪乱依存性植物 (ruderals) であり、適度な生態的攪乱が本種の多型性維持に重要であると考えられます。古座荒船において pinnatisect 型は、

普通に分布する pinnatifid 型とともに毎年安定的に見られましたが、1990 年代半ばに行われた海岸改修工事による表土の大規模攪乱と番小屋の集団転出による浜砂の貧栄養化によって絶滅しました。串本町 X 地点集団では、ごく少数の pinnatisect 型が pinnatifid 型および少数の lyrate 型個体と共に、2001 年 5 月末の時点でも混生し続けています。この集団の北側にあった少数の pinnatisect 型は、1990 年前後の海浜工事によって絶滅しました。

pinnatisect 型がなぜ東アジア数カ所に限定的に分布するのか、なぜ葉形が遺伝的多型を示すのか、それらの進化生態的意義は明らかではありません。

花弁色の変異

ハマダイコンの花弁色はふつう淡紅紫色ですが、時に白色花弁型個体も見られます。2001 年 4 月上旬に、和歌山県西牟

婁郡すさみ町と串本町、東牟婁郡古座町、那智勝浦町の海岸部に分布する開花中のハマダイコン集団を対象に、白色花弁型個体の頻度調査を行いました(表)。集団によって白色花弁型の出現頻度は異なりますが、0%から最大で 5.0%で、平均は 1.3%でした。串本町や古座町では、白色花弁型がここ 10 年以上、わずかながら観察されています。一方、白浜町臨海では、この数十年間、白色花弁型は全く認められませんでした(白浜町檜山嘉郎さん、私信)。このような差異の原因は不明です。淡紅紫色花弁型と白色花弁型の形態的差異や両型の生態的住み分けは、今回の調査では認められませんでした。花弁の白色性を支配する遺伝子の起源は、自然突然変異とか栽培ダイコンからの遺伝子流動などが想定できますが、詳細は不明です。

ところで、ハマダイコン花を詳しく観

表 紀伊半島南部のハマダイコン集団における白色花弁型の出現頻度

集 団	調査日	調査個体数	花 弁 色 型	
			淡 紅 紫 色	白 色 (%)
白浜町臨海	April 8, '01	80	80	0 (0.0)
すさみ町江須崎	April 6, '01	100	99	1 (1.0)
串本町潮岬	April 7, '01	100	95	5 (5.0)
串本町出雲	April 7, '01	100	99	1 (1.0)
串本町 X 地点	April 2, '01	100	100	0 (0.0)
串本町橋杭	April 6, '01	100	100	0 (0.0)
串本町大島須江	April 2, '01	100	100	0 (0.0)
串本町大島檜野	April 2, '01	100	95	5 (5.0)
古座町田原	April 9, '01	50	50	0 (0.0)
古座町荒船 A	April 7, '01	100	96	4 (4.0)
古座町荒船 B	April 9, '01	1200	1194	6 (0.1)
那智勝浦町玉の浦	April 7, '01	100	100	0 (0.0)

梅本・久保田(2001)を改変。

察すると、花弁の色調上の微細な個体間差異が淡紅紫色花弁型と白色花弁型それぞれに観察されました。このことから、花弁色の遺伝様式は単純では無さそうです。さらに、昆虫から見た花弁色型と昆虫との共進化との関係にも興味を持たれます。

変異の意義と保全

このようにハマダイコンは、葉や花弁色において種々の変異を持ちます。そうした遺伝的変異が、風や訪花する虫媒昆虫によって「地」ハマダイコンから栽培ダイコンにもたらされ、あるいは逆流しながら各地に伝承される地ダイコン品種の成立と維持に貢献してきたと考えられます。

珍奇な生物の保護や話題に目が走りがちですが、普通の植物と普通の動物を合



白花の
ハマダイコン

わせた普通で身近な生態系の意義や回復、保全にも意識を振り向けるべきなのです。

なお、ハマダイコンの若い莢は美味しく生食でき塩漬け貯蔵も可能なので、採取の際には本報告にあるような変異と食味との関係に注意を払うと面白い関係が見つかるかもしれません。

(梅本信也)



Chapter3

方言

Ethnological collections

紀伊大島の民俗気象

風の表現

紀伊大島の人々にとって、風はたいへん重要な気象要素の一つです。漁獲の善し悪しを決め、ときには生命を奪うことさえあるからです。

風は、方向と強さに分けて考えると、理解しやすいと思います。一般に気象の観測では、東西南北といった絶対方向を用い、毎秒何メートルという単位で風速を表します。これが国際標準というわけです。

しかし、世界各地では、古くから生活に密着した方向や風の表現を行ってきました。局地気象は、気象衛星規模での現象と異質であることが多く、微

妙な変化を見せます。こうした表現を民族気象とか民俗気象といいます。このような地域の知恵は、風土を理解する上でたいへん重要であって、国際標準表現と共に伝承されるべきだと思います。

以下に、紀伊大島における代表的な風現象を示す表現を列記してみましょう。ただし、これらの風名は、漁師さん達の呼び方です。方向や強さ、ゆらぎによってたいへん細かく分類されていることが一目瞭然です。「西の風」では、地区によって内容が違っていることに注意して下さい。

(岩谷知明・梅本信也)

風 名	漢字表記	標 準 名	備 考
こち	東風	北東風	
きたごち	北ごち	北北東風	
おおごち	大ごち	北東風で強風	
にしのかぜ	西の風	西風～北西風	大島地区では西風だけ
きたっぼ	北ぼ	北風～北西風	
きたっば	北ば	北風～北西風	
まぜ		南西風（南よりの風～西よりの風）	
やませ	山背	南西風（南よりの風～西よりの風）	
やまぜ	矢まぜ	南西風（急に吹く風）	
はやて		西よりの突風 または疾風	
いなさ		東よりの突風	
おきからのかぜ	沖からの風	南東風～南風	

四季の気象俚諺

現在では、気象台が最新の観測機器と観測網、高速コンピューターを用いて、将来の気象を予測しています。長中期の予報は的中精度が高いとはどうみても言えませんが、1－2日以内の気象予報は、停電しない限り、随分的中するようになりました。

しかし、気象予報が行われるようになる前は、地域に独特な局地・広域気象予報技術がありました。いわゆる諺とか俚諺がそれです。科学的に根拠がない物もありますが、結構的中する場合もあります。たとえば、台風の仕組みが分かっている頃、その解釈と予測に色々悩んだに違いありません。俚

諺には意味不明なものもありますが、それらは先輩や祖先達の観察や経験や知恵の賜であり、大事にしていきたいものです。頭と目を鍛えるには気象予報との併用が好ましいのではないのでしょうか。地震予知と同じく宏观予報がよいのではと考えます。

以下に、紀伊大島の気象に関する諺を季節別に、最後に通年のものを紹介します。一部の諺には解説を施しました。科学的に納得できる物も少なくありません。昭和時代かそれ以前には、もっとたくさんの諺があったのでしょうか。

(岩谷知明・梅本信也)

	ことわざ	解 説
春	山背返しの西（にしゃ）怖い。	寒冷前線通過後に吹き返す西風。
	トキヨ吹いたら鰯（さわら）来る。	高気圧中で昼から2－3時間西風が吹くと鰯がやってくる。
	台湾坊主	台湾近海で低気圧が発生し日本海にはいると春一番となる。
	ツバメが低く飛んだら雨になる。	
夏	アリの行列を見たら雨になる。	
	土用に庭を掘るな、怪我をする。	
	那智山に入道出たら雷が鳴る。	
秋	西の空が焼けたら晴天続く、東の空が焼けたら雨近い。	
	強・恐東風、コワゴチ	強い北東風が1週間続き、台風が接近する。
	山背返しの西（にしゃ）怖い。	台風通過時に吹く南風からの吹き返しの西風で被害が大きい。
	台風が多い年はハチが巣を低く作る。	
	フナ虫が陸の奥に上がると大型台風が来る。	
	台風が接近するときはウネリが4－5日前から段々と大きくなる。	
	台風が接近しないときはウネリは、大きくなる。	
	大きな台風が来るときは、何日も前から空が真っ赤に焼ける。	
	大きな台風が来るときは、イソモノ（巻き貝）がメエ（海藻）にしがみついて喰う。	

(次頁へつづく)

	こ と わ ざ	解 説
秋	ヨシ（ダンチク）の花が咲いてからの台風は怖い。	
冬	雲がちぎれて流れたら、風がまくる（強くなる）	季節風のこと。
	西の空が光ったら雷風がまくる。	季節風のこと。
	雲がちぎれて晴れたら風が来る。	季節風のこと。
通年	東風の昼から。	大島地区の東風は北東風。
	東風の昼から雨。	
	日当たり雨はキツネの嫁入り。	日が射しているのに雨が降る。
	朝焼けは日和が落ち。	雨になる。
	日和のカンパチ。	上天気。
	山が近いと雨。	湿気で空気が澄み、見通しがきく。
	山が近いと風。	空気が流れ、澄む。
	ハトが鳴いたら雨になる。	
	トンビが高くとんだら雨。	
	子供が騒いだら明日は雨。	幼児がギャッキョウ笑うのを猿回しという。
	南西風（まぜ）が吹いたら海水温が下がり、北東風（こち）吹いたら海水温が上がる。	
	海底（そこ）が動いたら漁がある。	時化明けに餌のために移動する。
	古座の川口に雲がかかったら東風雨。	1－2日後に雨がある。
	月が傘被ったら雨。	傘の輪が幅広く、薄いときは天気は荒れない。傘の輪が短くて濃いとき、天気は荒れる。
	月夜の晩に悪い天気はない。	
	地震の揺る日和やのう。	地震があるときはベタ凧以上に凧ぐ。北海道奥尻島地震の時と同じ。
	日和みたあるのう。	気圧等が原因で頭痛になったり体長を崩す。
	雨かいだあるのう。	暖かい湿った風が吹いたとき。



大島の磯



キンメダイ

写真：木本隆三

紀伊大島の魚類方言

生活に見近なものには地方独特の名称が宛てられています。これを方言といいます。ここでは、おもに紀伊大島樫野地区で1998年から2003年に採取された方言を紹介します。

標 準 和 名	樫 野 方 言
ジンベイザメ	じんべい
メジロザメ	ふか
シュモクザメ	しゅもく
オニトマキエイ	ぎえ, まんた
エイ類	えぶた, えい
シビレエイ	でんきえい, びりびり
ネコザメ	ねこざめ
ナヌカザメ	せんすいかん
ネムリブカ	ねむりざめ
ヨシキリザメ	よしきり
ニタリザメ	おながざめ
カスザメ	かすざめ
ホシザメ	ぎょらい, ほしざめ
アカシュモクザメ	しゅもく
トビエイ科	うしばなとびえい
ツバクロエイ	つばくろ
カタクチイワシ	どろいわし
ウルメイワシ	うるめ
マイワシ	ひらご
キビナゴ	きびなご
トラウツボ	じゃうつぼ
ハナピラウツボ	こめうつぼ
ワカウツボ	こめうつぼ
ウツボ	うつぼ
マアナゴ	どうまき
オオシロアナゴ	どうまき
ハモ	はも
ゴンズイ	ごんずい
サケ	しゃけ
マエソ	えそ
アカエソ類	もはぜ
ヒメ	ひめじ
サヨリ	さより
ダツ	だつ, らす
サンマ	さえら
トビウオ	とびうお

標 準 和 名	檜 野 方 言
サヨリ	さより
ダツ	だつ, らす
サンマ	さえら
トビウオ	とびうお
タツノオトシゴ	たつのおとしご
アカヤガラ	やがら
アオヤガラ	やがら
サギフエ	ふえふき
イタチウオ	いたちうお
シマイザリウオ	いざりうお?
マトウダイ	まというお, まといお
キンメダイ	きんめ
マツカサウオ	まつかさうお
イザリウオ類	いざりうお
アカグツ	あかくつ
アカマツカサ	うみきんぎょ
クロオビマツカサ	うみきんぎょ
トウゴロウイワシ	とんごろう, とごろ, とん
ボラ	ぼら
アカカマス	めあか
ヤマトカマス	かます
ムギイワシ	はだか, たいしょう
ハタ類	はた
クエ	くえ
ホウキハタ	はるか
ヒトミハタ	いぎす
マハタ	ます
タマカイ	たまかい
ネブツダイ	でんきち, れんきち
ムツ	むつ
ミナミキントキ	かねひら
ツムブリ	つむぶり, つんぶり, ぼうだら
ブリ	ぶり
小型魚	つばす
中型	はまち
	めじろ
大型	ぶり
ヒラマサ	ひらまさ
カンパチ	かんぱち
小型魚	しお
中型	かんぱち
大型	あかはな
シイラ	とうひゃく, とうやく

標準和名	樫野方言
マアジ	あじ, まあじ
ムロアジ	むろ
オアカムロ	おあか
マルアジ	あおあじ
メアジ	どんばく
シマアジ	こせ, しまあじ
カスミアジ	おばごせ
オジサン	めんどり, おじさん
ヒメジ	ひめじ
ツマグロハタンボ	あたぼ
メジナ	ぐれ
クロメジナ	おなが, おながぐれ
イスズミ	いずすみ
小型魚	きつとう
アユ	あゆ
ウナギ	うめいろ
ウメイロ	うめいろ
コロダイ	ころだい, ころ, かいぐれ
イサキ	いさぎ
小型魚	むぎわらいさぎ
小型魚	うりぼー
コショウダイ	こしょうだい
ヒゲダイ	まつだい
イトヨリ類	いとりこ
タマガシラ	たまがしら
マダイ	たい
ヘダイ	へだい
チダイ	ちだい
クロダイ	ちぬ
タマメイチ	めいちだい
フエフキ類	ふえふき
ハマフエフキ	ふえふき, たまみ, たばみ
アカククリ	くそくい
カゴカキダイ	あぶらいお
チョウチョウウオ類	ちょうちょううお
イシダイ	いしだい
若魚	さんばそう
老魚	くちじろ
イシカキダイ	こめかみ
クマノミ	くまのみ
オヤビッチャ	おやびっちゃ
タカノハダイ	たかのは
ミギマキ	ひだりまき

標準和名	樫野方言
イラ	いざ, いざぼうず
べら類	べら
ササノハベラ	ごまんりょう
アオブダイ	あお
ブダイ	いがみ
雌	あかいがみ
雄	あおいがみ
コバンザメ	こばんざめ
バショウカジキ	ばしょう
マカジキ	まか, かじき
クロカジキ	くろかわ
シロカジキ	しろかわ
マサバ	まるさば, ひらさば
ゴマサバ	ごま
サワラ	さわら
小型魚	さごし
カマスサワラ	おきさわら
ハガツオ	はがつお
ヒラソウダ	そま, そうだがつお
マルソウダ	めじか
スマ	やいとがつお
カツオ	かつお
ビンナガ	とんぼ
小型魚	ことんぼ
中型	とんぼ
クロマグロ	まぐろ, ほんまぐろ
小型魚	しびこ
中型	よこわ
大型	まぐろ, ほんまぐろ
キハダ	きはだ
小型魚	めじ
中型	ひっさげ
大型	しび
メバチ	ばち, だるま
小型魚	だるま
大型	ばち
マナガツオ	まながつお
タチウオ	たちうお
ヒメテングハギ	なんぼうはげ
ニザダイ	さんのじ
回遊性	かしのはげ
アイゴ	あいのぼり
ハゼ類	はぜ

標準和名	樫野方言
ミノカサゴ	やまのかみ、みのかさご
メバル	めばる
カサゴ	がしら、ごっちょ、あかごっちょ、くろごっちょ
ハチ	はなおこぜ
ホウボウ	ほうぼう
セミホウボウ	せみほうぼう
ヒラメ	ひらめ
マガレイ	かれい
メイタガレイ	かれい
シタビラメ類	したびらめ
ギマ	ぎま
カワハギ類	無名
カワハギ	まるはぎ、まるはげ、しょまはげ
ウマヅラハギ	うまづらはぎ、うまづらはげ
ウスバハギ	らけっと、しゃぼてん、しびとはげ
ハコフグ	はこふぐ
フグ類	ふぐ
クサフグ	くさふぐ
トラフグ	とらふぐ
シロサバフグ	さばふぐ
クロサバフグ	さばふぐ
マンボウ	まんぼ

調査者：梅本信也 協力者：樫野在住・岩谷知明
調査日：2003.2.3/2003.2.14 修正日：2003/3/5



写真：木本隆三

紀伊大島の海産生物方言

[illegible]

[illegible]

調査者：梅本信也 協力者：岩谷知明 調査日：2003/3/5



サザエ



イカ

写真：木本隆三

紀伊大島の植物方言

方 言	区 別	和 名
あざみ		アザミ属
あしたば		アシタバ
あわだちそう		セイタカアワダチソウ
いちご		クサイチゴ
いぬえべしょ		
いばら		ノイバラ属
えべしょ		
おにしだ		ウラジロシダ
おばこ		オオバコ
かいしき		アオノクマタケラン
かしわいちご		ホウロクイチゴ
かしわのき		アカメガシワ
かづら		キイセンニンソウ
かづら		クズ
かづら		サカキカヅラ
かづら		テイカカズラ
かづら		ピナンカズラ
かや		ススキ属
かや		ススキ
ぎしぎし		スイバ類
きふじ		キブシ
くすのき		クスノキ
くまたけ		ハナミョウガ
ぐみ		ツルグミ
ぐみ		ナワシログミ
こけ		センタイ類
こそうなかし		?
こなすび		コナスビ
ごんぱち	ごんぱち	イタドリ
	みずごんぱち	
さんごじゅ		サンゴジュ
しい		スタジイ
しだ		カニクサ
しだ		コシダ
じとうし		チドメグサ属、カキドオシ属
じねご		カタバミ中柱花型
しば		ヒサカキ
じゅうやく		ドクダミ
すぎ		スギ
すみれ		スミレ属

方 言	区 別	和 名
たぼ		アオダモ
たぼ		ヤブニッケイ
たんぽぼ		タンポポ属
ちそ		シソ
つくね		栽培ヤマノイモ
つばき		ツバキ
つや		ツワブキ
てっぽうぐさ		フウトウカズラ
てんぐのはな		ヤマノイモ属
とびらぎ		トベラ
とま		チガヤ
なんてん		ナンテン
ねじれぐさ		ネジバナ
はぜ		ハゼノキ
はまごぼう		ハマアザミ
ひがんばん		ヒガンバナ
びしゃこ		ヒサカキ
ひっつきばあ		イノコヅチ属
ほうとり		オヒシバ
まき		イヌマキ
まめぐさ		スズメノエンドウ属
みつば		ミツバ
もっこく		モッコク
やたび	やたび	イヌビワ雌株
	いぬやたび	イヌビワ雄株
やまもも	みずもも	ヤマモモ
	やまもも	ヤマモモ
ゆり		ササユリ
ゆり		タカサゴユリ
よごみ		ヨモギ
よめな		ヨメナ
れんろくぐさ		ムラサキカタバミ
わかば		ヒメユズリハ
わらび		ワラビ

調査者：梅本信也

協力者：樫野在住・岩谷紀子

調査日：1998 年



チガヤ



ワラビ

文 献

- ・和歌山県潮岬火成複合岩体の地質と岩石．地質学雑誌 87 (6), 383-403, 1981.
- ・ヒサカキの民族植物学の一側面．Sago study 3 (1), 15-16, 1992.
- ・菊科オオツワブキ串本町に産す．南紀生物 34 (1), 20-21, 1992.
- ・椿の葉の話．しぜんしくらしき．1, 7, 1992.
- ・紀伊半島南部における山蜜蜂の伝統的飼養．近畿作育研究 40, 59-68, 1995.
- ・水田畦畔と畦畔植物の多様性．種生物学研究 21, 27-33, 1997.
- ・アイソザイム分析によるスズメノテッポウとセトガヤの幼苗期における種の判別．雑草研究 43 (3), 267-276, 1998.
- ・紀伊大島植物目録．京都大学大学院農学研究科附属亜熱帯植物実験所, 83p, 2000.
- ・雑草と染色文化＜黒潮あらう八丈島＞－黄八丈を染めるコブナグサをめぐる－．月刊染色 α 233 ; 54-56, 2000.
- ・紀伊大島きのこガイド．コスミック印刷．京都, 54p, 2000.
- ・田舟と撻斗と龍船と．照葉樹林文化論の現代的展開(金子努ら編)．北大図書刊行会, 札幌, 315-334, 2001.
- ・照葉樹林帯における一年生雑草の半栽培の風景．照葉樹林文化論の現代的展開(金子努ら編)．北大図書刊行会, 札幌, 513-528, 2001.
- ・郷土資源植物複合の適正保全するための新概念の提案．2000年度「わかやま学21」地域連携推進事業成果報告書「紀伊半島における郷土資源植物複合の伝統的保全に関する研究」．2-9, 2001.
- ・和歌山県土に伝承される資源植物名称．2000年度「わかやま学21」地域連携推進事業成果報告書「紀伊半島における郷土資源植物複合の伝統的保全に関する研究」．10-12, 2001.
- ・2000年度「わかやま学21」地域連携推進事業成果報告書「紀伊半島における郷土資源植物複合の伝統的保全に関する研究」．13-28, 2001.
- ・里山資源植物の伝統的利用と *on situ* 保全．2000年度「わかやま学21」地域連携推進事業成果報告書「紀伊半島における郷土資源植物複合の伝統的保全に関する研究」．29-32, 2001.
- ・和歌山県紀伊大島におけるメダケの利用．富士竹類植物園報告 45, 125-129, 2001.
- ・紀伊大島スダジイ林の巨大なシイサルノコシカケ．南紀生物 43 (1), 27-30, 2001.
- ・紀伊半島南部におけるハマダイコンの変異．南紀生物 43 (2), 155-158, 2001.
- ・和歌山県古座川町一枚岩に岩上生する巨大なヘリトリゴケ．南紀生物 43 (2), 98-101, 2001.
- ・紀伊大島檜野の魚付林の歴史－字黒山および字棹取平三を中心に－．近畿大学農学部紀要 34, 165-172, 2001.
- ・紀州におけるダンチクの植物文化誌．熊野誌 47, 6-22, 2002.
- ・紀伊大島におけるチガヤおよびススキの利用と保全の歴史．大阪府立大学院農生学術報 54, 41-47, 2002.
- ・紀伊大島へのスイカズラ科ハクサンボクの人為移入と分布拡大．くろしお．21, 1-5, 2002.
- ・センダングサ種子の風散布．くろしお．21, 14, 2002.
- ・紀伊大島におけるアオノクマタケランの植物文化誌．熊野誌 48, 102-116, 2002.
- ・紀州里域植物方言集．194p．プレスネット, 長岡京市．2002.
- ・水田秋植物に関する一考察．分類 3 (1), 47-51, 2003.

黒潮文化研究会

代 表	梅本信也	串本町紀伊大島須江地区
副代表	木本隆三	串本町紀伊大島大島地区
	田代一臣	串本町紀伊大島大島地区
	木本フヂコ	串本町紀伊大島大島地区
	岩谷知明	串本町紀伊大島檜野地区
	下地一夫	串本町潮岬出雲地区
	上地 治	古座町西向地区

協力者 近畿大学 種坂英次
南紀生物同好会 吉田元重
岡山大学 榎本 敬
倉敷市立自然史博物館 狩山俊吾
兵庫県立人と自然博物館 秋山弘之
京都大学 羽谷啓造

編 著 者 の 紹 介

梅本信也

1959年和歌山県和歌山市生まれ，県立桐蔭高校から京都大学農学部，同大学院農学研究科修士及び博士課程修了，京大農学博士
京都大学フィールド科学教育研究センター・里域ステーション・紀伊大島実験所 里域生態系保全部門 勤務，専門は里域生態保全学，里域文化論

串本町紀伊大島在住

主な著書：「雑草の自然史」(分担執筆)，「紀伊大島きこのガイド2000」(共著)，「照葉樹林文化論の現代的展開」(分担執筆)，「雑草科学実験法」(分担執筆)，「紀州里域植物方言集」，「雑穀の自然史」(分担執筆)

紀伊大島フィールドガイドー自然編ー

The natural elements of KII-OHSHIMA Island, Japan

2003年7月5日 初版第1刷発行

編著者 梅本信也

〒649-3632 和歌山県西牟婁郡串本町紀伊大島須江 1330-1
Phone : 0735-65-0125

印 刷 ユニバース印刷

〒617-0843 京都府長岡京市友岡2-10-2
Phone : 075-953-4335
